

巻頭言

工学系学会連合ウェブサイトの創設に向けて —“Watt & Edison”の挑戦—

Toward Establishment of Website for Union of Academic Societies of Engineering
—Challenge by “Watt & Edison”—

一般社団法人 エネルギー・資源学会 編集実行委員会 委員長
京都大学 大学院 工学研究科 航空宇宙工学専攻 教授

吉田 英生

Hideo Yoshida

(E-mail : sakura@hideoyoshida.com)



4年前の年頭、やはり本誌に巻頭言¹⁾を寄稿させていただきましたが、まさかそのわずか2ヶ月後にあの東日本大震災がわが国を襲うことなど夢にも思いませんでした。高度に進化し巨大化・複雑化した現代文明では、わずかなほころびから生じてしまう人災はほとんど不可避とはいえ、人々の故郷を広域かつ長期間奪ってしまうような途方もない人災が発生したのはショックでした。そして、機械系の熱工学に関係してきた自分の責任と無力さを痛感したことは申すまでもないので、同時に学会の責任と無力さも感じました。事後にいくら事故調査を行ったり今後に向けて提言を行ったりしたところで、2011年にあの事故を未然に防ぐことができなかった事実は変わりません。一方、筆者が最近よく出席するいくつかの学会の理事会での議論は、例外なく会員数の減少をどうやって食い止めるか—そもそも会員のメリットは何か?に始まり、さらなる「活性化」の三文字に行き着きます。つまり、学会は外部(社会)に向けてその専門性に基づいた助言や行動が十分に行えていなかったと同時に、内部(会員)に向けて魅力を失ってきていると言い換えることができると思います。

後者の会員数減少はいたしかたないとも筆者は考えています。現在は団塊の世代の方々引退される時期と少子化に象徴される人口構成の変化もあり、さらに情報入手も種々の手段で行えるので、同学の士との出会いを特に求めるのでなければ学会所属の必要もそれほどないともいえるからです。ですから、会員数減少そのものは学会の財務基盤を脅かさなければ容認してもよいとも思いますが、もし学会の存在感が増すことがないあるいは減少するとしたら、これは由々しき問題だと思うのです。

大学(に代表される教育・研究機関)は、個人の人生との関わりの中で一般市民に日常的に強く意識されています。しかし、その大学に残った教育者・研究者や一般組織の研究者が活動の場とする諸学会の存在は、一般市民にほとんど認知されていないといっても過言ではないと思います。ノーベル賞のような輝かしい成果は個人の功績としてトップの話題の一つになりますが、頂上だけでなく広大なすそ野に相当するともいべき学会がマスコミの話題になることはめったにありません。

学会が社会に関わる重要な側面の一つとして、筆者は日常的な情報提供に強い関心を寄せています。今やインターネットの普及で分厚い百科事典は消え、誰しもがGoogleなどの検索やWikipediaにキーワードを入力するようになりました。そんな中であって、故竹内均先生が日本のナショナルジオグラフィックを目指したといわれる“Newton”は1981年の創刊以来、科学技術情報の普及に大きな貢献をしまし、現在もなお大きな存在感を有しています。一方、筆者が所属する工学系諸学会(本会は工学以外のさらに広い分野を含んでいる希有の学会ですが便宜上この中に含めさせていただきます)を見渡しますと、「中学生がよんでわかる科学雑誌」とも言われるNewtonのような平易で魅力的な記事にはかきませんが、一般市民に広く提供できれば有用で良質な記事は多数あります。

そこで、工学系諸学会で連合して厳選した記事をインターネット上でオープンアクセスにできないかと考えたのが、現在、筆者がプロトタイプを試作中の“Watt & Edison”です。筆者が編集委員として関与した諸学会で既にオープンアクセスになっている(一部は著作権を有する機関の許可を得た)拙記事を中心に、さらに知人の貴重な記事などを協力いただいてアップロードしています。まだコンテンツが少ないので適切な分類整理はできていませんが、もし学会連合で本事業を進めることができたなら、このオンラインの書棚は工学全般からなる充実したものとなるに違いないと確信しています。あわせて、厳選した世界中の有益なサイトへのリンクも整備すれば、一般市民が科学技術情報を入力する際にまずアクセスしてみる信頼に満ちたハブとならないだろうか—その意味で「科学技術情報のソムリエ／ソムリエール」という文言も付与しました。そして、副次的に一般市民が工学系諸学会の存在を身近に感じていただけたらと願う次第です。



<http://www.wattandedison.com>

1) 吉田英生：あたかも一身にして多生を経るが如く一人にして多身あるが如し然し，エネルギー・資源，32-1 (2011)，2。